

講座名	森に親しむ野外講座 ～千葉の森の今と昔 大多喜県民の森を巡る～		
開催日時	2023年 3月28日(火) 8時30分出発 ～17時帰着		
開催場所	大多喜町大多喜県民の森、大多喜城趾	一般参加者	10名

活動概要

あいにくと晴れ間がみられない天候でしたが雨には遭わず、まずまずのコンディションで自然観察を楽しめました。行きのマイクロバス車中で、日本の森と千葉県の森の特長、更に人工林の特徴と、植栽する樹木と植え方の違い(ex. 尾根にはマツ、谷にはスギ、中間はヒノキを植える = 尾根マツ、谷スギ、中ヒノキ)等について簡単に説明しながら進むと1時間少して到着しました。

駐車場の前にはこれから巡る散策路が谷筋に付けられ、その左右の尾根に到る斜面には立派なスギ林が展開しています。早速、斜面の傾斜と、植えられたスギのてっぺん(頂部)をなぞった包絡線の傾斜を比べてみます。明らかにスギ頂部の包絡線の傾斜の方が斜面の傾斜よりも緩やかで、谷に植えられたスギの方が斜面のスギより背が高いことが判ります。これが「谷スギ」と云われる由縁であること、皆さん納得されていました。

更に駐車場のソメイヨシノ、散策路入口のオオシマザクラ、森の中のヤマザクラなどの観察、それぞれの特徴と見分け方を観察しながら先に進みます。人工林といえども林床にアオキが多く見られる点が、南総のシカ害が甚だしい森とは明らかに違います。また暖温帯における本来の植生である常緑広葉樹：スタジイ、ウラジロガシ、アラカシ、サカキなどの幼木が多く見られ、このままの状態が続けばこの地の本来の植生である暖温帯常緑広葉樹の森に遷移して行くであろうことが理解できます。そのほかにも、多くの植物とシダ類が次々に現れ、更には県北では殆どみられないヒガンマムシグサ(性転換する植物)が随所で観察されました。

1時間半ほどの散策のあと大多喜城趾へ、城趾の周囲に残ったかつてのスタジイ林の面影(?)を観察してから昼食を県民の森広場で摂り、竹の博物館を見学した後、午後の観察に出発しました。

房総が北限のブルーベリーの仲間であるシャシャンボの観察、更にスギ林からヒノキ林に変わる林を尾根伝いに歩き、スギの品種による葉の形状の違い、尾根のあちこちで見られるヤマザクラ、「氷河期の生き証人」とも言われるカンアオイ、毎年1段ずつ成長するシダ類(ウラジロ、コシダ)等々も観察、大多喜の自然を充分楽しんで帰途につきました。



谷～斜面に植えられたスギ



駐車場のサクラも満開



ヒガンマムシグサ



森の植物観察



カンアオイ

F I C講師 チーフ：稲岡 スタッフ：金井、長岡、片山